

花吹雪の散り敷く上に、早朝に降った雪がうっすら積もった日。長崎から横浜能楽堂へ小鼓の飯田清一さんの追っかけ(?)で観に来た3人と一緒に、道成寺（赤頭）を観ました。

シテは中森貫太。パンフレットに「能は日本中からメンバーを集めても簡単な打ち合わせで素晴らしい舞台が構成される」と謳われているだけあってワキ・福王和幸（大阪）、笛は竹市学（名古屋）、小鼓・飯田清一（福岡）、大鼓・河村真之介（名古屋）、太鼓・小寺真佐人（東京）と最近注目を集めている50歳前の若々しい出演者の参集でした（40代の人達を若々しい！と感じるなんて私も歳ですね）。

道成寺は大曲中の大曲で、改めてストーリーや展開を説明するまでもなく、よく知られているので割愛しますが、この日も厳かに鐘が引き上げられ、アイの女人禁制のおふれが終わってから、シテの登場で最大の見せどころ、白拍子舞の乱拍子が始まりました。シテと小鼓は一気打ちと言われるだけあって、二人共渾身の迫力でした。特に飯田先生は顔が真っ赤になるほど熱がこもっていたので、観ている方も思わず肩に力が！。この長い乱拍子の後には、激しい急之舞、そして扇でパシッと烏帽子を払って鐘入りするまで、私の大好きな場面です。今回は鐘入りは見事でしたが、烏帽子の紐を緩めるタイミングがやや早かったと見所の小雀は見逃しません。

しかし、あの鐘の中で、誰の助けも借りず装束を付け直すのは、やはり相当難しいと察せられますし、中から銅鑼の音がするのは準備完了の合図と今回分かりました。ワキも長丁場の語りがあり、どのパートの人にとっても道成寺は難曲だというだけに、観ている方もその緊張感と高度な芸に、最後まで引き込まれるように観てしまうのが道成寺だと思います。

この日は、演能に先立ち馬場あき子さんの解説がありました。馬場さんの話はいつもとても面白くて興味深く聞くのですが、その中でも「道成寺は何度も観ている人が多いでしょうが、今回は『花の外には、松ばかり。暮れ初めて鐘や響くらん』というフレーズや『春の夕暮。来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける』と繰り返す言葉を能の中で味わってみてください。松は松だけでなく待つという意味もあるし、また言葉は繰り返されながら呪文の意味合いに変わっていく面白さがあります」という話や「能では僧に弔われて鬼女は成仏するというケースが多いけれど、道成寺では大蛇は最後に再び日高川に飛び込んで逃げるので、この話はエンドレスなのです」と。

確かに今回、私は挙げ幕の奥まで見える座席でしたので、シテが挙げ幕の向こうに行った後、飛び上がって水に飛び込む所作をすることが出来、新しい発見に驚きました。

私は今までに道成寺は8回観ました。一回ごとに新しい発見があり、前回の昭君のように初めて観る能も面白ければ、このように何度観ても面白いのが能の魅力だと思います。

私が初めて観た道成寺は11年前のシテ友枝昭世でした。友枝さんは、その10年前の演能で、鐘入りの時、首を骨折して終演後、数週間に亘って入院されたと聞きました。だから再度道成寺に挑戦された気持ちはいかほどだったことか。しかし私が観た能は最初から最後まで固唾を飲むほど見事で素晴らしく、あの感動は忘れられません。さすが人間国宝になれる人だけありました。能は一期一会で、そこに足を運ばねば、その感動は得られませんし、見るたびに今まで知らなかった事に気が付き発見があるので、私の観能もきっとエンドレスとなるでしょう。

付け加えますと私はここ10年程、観た能をほとんど記録しているのですが、そのノートを見てみると道成寺より多く9回観た能が3番あり、羽衣、清経、もう一つは自分自身の演能に役立てようと一所懸命に観た杜若でした。（尾崎記）

